

【談話室】

貝と飛行兵たち

鈴間愛作*

終戦後早や45年にもなりました。当時の親兄弟が旅路にあゆみ、つらい思いが、かなしみが、わすれかけている今日、自分の腹をいためた我が子、最愛の主人、兄弟が、今だ現地で戦場の草場で一片の骨となり、虫にくわれ難い手足の骨が遺骨収集の日を待っている現実です。

私も昭和16年4月京都四十三部隊へ入隊、以後ビルマ戦々に従軍、南方軍(威)第三航空軍(司)第五飛行師団(高)兵占自動車八十六中隊に入隊。昭和21年7月浦賀港に、複員5年3ヶ月神仏の御蔭で日本の地をふみ今日にいたりました。愛車六十三号(フォード1938年型)で飛行第八十一戦隊(司偵)、飛行十二戦隊(重爆)、飛行第六十四戦隊(戦闘)、飛行第八戦隊(司偵・軽爆)、五飛行師団とあちこちと分遣したが、第五飛行師団加藤隼戦闘隊へ3ヶ月間、食料人員資材輸送任務した時の御話を致します。昭和17年7月ここビルマ「アラウンバヤ王」が戦捷を祈願した黄金まばゆい「シユエダゴンパコダ」の見えるビクトリア湖の一角に宿舎があつて、毎日ミンガラドン飛行場へ人員資材輸送任務にたずさわった隼戦隊の地上パイロットになった。

夕方戦隊宿舎へ帰り戦法攻撃空中戦の様子を、隼機の戦法を話しながら特別食を召し、白鹿の特級を飲み武勲を話しながら、にぎやかな一夜であった。当時の隊長はわされたが、たしか穴吹軍曹中村大尉さんが居たと思います。若き幼年飛行兵が56名集まるに皮の「ずのう」から貝を56個ずつ出して見せ合い、一時を笑い合い、ふざけ合い、楽しんで居りました。

その貝はウキダカラ、カモソダカラ、ハナビラダカラ、キイロダカラ、ハナマルユキ、カノコダカラ、カスミダカラ類で南方各地の浜辺で拾った貝だと思います。若き飛行兵が、明日の生命もわからぬ寸時を貝にたくし大切に「ずのう」にしまい笑い合った光景が目に浮んで来ます。

命より大切な貝をどんな思いで身に付け敵地上空へ行き、敵機と空中戦をやり、そのまま帰らぬ飛行兵もあった。貝は女性のシンボルに似て遠く印度洋アンダマン諸島では、宝貝(シャンク貝)は神様となってあがめ護つられて居る。飛行兵達も好きな恋人が、母親が、世話になった女性のおもかげを貝に思いをはせて居たと思います。福井県下ではサバダカラ、ウキダカラ、ザクロガイが採集されて居ります。昭和55年頃、温行会の旅行で東京日光へ行った時、護国神社へ参拝、博物館に入館。軍神名有る武勲者の遺品をながめていたが、何人かの遺品の中に貝類がならべてあった。外の人々は貝には気も付かずだが、私は時間も気にせずガイドさんがむかえに来るまで見物させてもらった。貝はみな南方産の色あせた宝貝でした。

今だ五、六千メーターの深海底で飛行機の操縦桿をにぎり、貝類を腰のずのうにさげ収集を待つ

* 916-04 福井県丹生郡越前町厨 日本貝類学会会員

鈴 間 愛 作

ているかも知れません。又、人跡未踏のジャングルの中で不時着し、遺骨収集を首を長くして待っている兵士もいると思います。

この勇士軍人の英霊の冥福を祈り二度と戦争をしてはならぬと思います。飛行兵が、勇士が、宝貝を持って戦場へ行く心理は私にはかいめい出来ませんが、厚く冥福を祈り、貝と飛行士たちの一ペンを止めます。